

田村俊子作品集

第Ⅱ卷

田村俊子作品集

第1卷

監修

・瀬戸内寂聴

・小田切秀雄

・

・

江苏工业学院图书馆
藏书



田村俊子作品集・1

1987年12月10日 発行

定価 3500円

著 者 田村 俊子

発行者 武内 辰郎

発行所 (株) オリジン出版センター

東京都新宿区岩戸町16 メジャー神楽坂402

電話 (03) 260—0453

振替 東京 0—44705

装 幀 山本 亜矢

印 刷 (株) ケイエムエス

落丁本・乱丁本はお取り替えします

目

次

——田村俊子作品集・1

あきらめ	7
生血	187
魔	201
離魂	221
誓言	239
惡寒	265
嘲弄	277
女作者	295
木乃伊の口紅	307

憂鬱な匂ひ

.....

375

〈処女作〉

露分衣

.....

399

解説

—— 田村俊子の三回の復活、文学史、女性史上の位置

.....

425

解題

.....

435

長谷川 啓

田村俊子作品集・1

あきらめ

一

富枝は歸らうとして校舎の裏手へ出て見た。生徒は大抵散じ盡したあとで、遙か寮舎の方で水を使ふ音が聞えてゐた。園藝好きの古井が、花鋏を持つて坂を下りてゆくのが見えた。何と云うでもなく呼んで見ると彼方は近くを探しながらくると振向いて、富枝を見附けると莞爾として又歩き出した。

オリヅ色の袴が蹴上る。餘り白くない脛が白足袋の上を一寸ばかり露はれるのが遠目に分る。自分の培養した花を自慢に寮舎の各室へ挿して廻つて、皆から嬉しさうな挨拶を聞いてそれで満足してゐる。いまに理想の園を作つて一生を花の中に埋没して終ふのだと云つて楽しんでゐる。

絶対に世に出るな。甘んじて犠牲になれ。隠れて奮闘せよ。と教へる校長を戴く人として、あの人はその主義に背向かない方か何うだらうと富枝は考へた。自分の、虚名に心を腐らせたと云つて學監から訓とされた今の自分の立場から比較くらべて、平常注意ふだんを向けなかつた同級の一人の上にふと趣味深く立入つて見た。「——まづ根柢を作つて、立派な美しい花を將來に咲かせやうと勉めるのが校の主義、その根が功名を急いでは花の咲くべき期ときがない。——」と云つた淺見學監の低い聲が、校庭の涼しい風に新にされた囁きになつて、富枝の耳の奥に再び響き起つたやうに思はれた。

立並んだ寮の二階で、赤い色、白い色が消えたり現れたりする。前掛エプロンをかけた生徒が料理場へ入つてゆく。小學部の小さい生徒が三人手を組んで寮の門を出て来る。青だの桃だのゝ兵兒帶へいごを下げてゐる。彼様あなたに幼稚こゝろくての寄宿舎生活は、どんなに寂びしいことであらうと富枝は例いふになく不憫あはれな氣がおこつた。自分は明日から此校の土を踏まぬことになるかも知れない。二年馴染んだこの櫻も春を諠ふ三度目には逢はずに、葉の黄ばみかゝつた今を別れの最期と思ふと、學校を捨てるに未練はないが、校舎を取り繞めぐつた四邊あたりの風物に名残りなごりが惜まれる。例も讀むものを抱へては寄り掛つた圖書室前の桐の木の許ところへ行つて見た。圖書室の窓に白い窓掛が下りてゐた。

丁度同級の上田が、富枝を探しながら此所へ來た。

「もうお歸りかと思つてましたら。」

上田はアイボリー石鹼のやうな顔生地かほぎをしてゐる。毛が赤く生際の邊りは縮れてゐる。本郷通の洋品店の看板人形と云ふ評があつた。

「どんなこと仰有つて。」と聞いた。

富枝は答へずにゐた。今の場合、校長に代つて學監が云つたことを、然まで親交のない上田に明かに告げるのが何となく子供らしい氣がされるやうで、富枝は自分の威を保つと云ふ迄でもないが、返事することを避けるやうな風であつた。上田は押して、

「主義の下に何う斯うと仰有りはしませんでしたか。」

と好奇らしくその眼を輝かした。

富枝は學校さへ廢めればいゝのだと考へてゐた。脚本などを書いた爲に學監から注意を受けた。學校の籍を除かないうちは斯う干渉されるのも當然のことではあつた。主張したいことがあつても女性と云ふ點に省みて、この校門を毎日潜る以上學監へ對してそんなことも出来なかつた。

上田は若し貴女が學校を廢めるやうな事でもあると文藝會が寂びしくなる、スターを失ふのは惜しい、と云つた。

富枝は友人の言葉は兎に角、自分の狹生野富枝と云ふ名が明治の文藝史上の一端を染めかけてゐると云ふ事に就いて誇りの影が射さないでもなかつた。そして其の名が、廣い天下に戸の節孔を漏る日光のやうに細い一道の光線となつて現れたのを奇異にも考へた。

白手袋を箝めながら、英語の教師のミッセス、ミスが正面の石段を下りて來た。自轉車を曳き出すのを待つて、その後から兩人は並んで歩きながら門を出た。

水色のスカートが、帆に膨らんで走つてゆく、砂が僅づゝ尾をひく。襟を廻ぐつた飾りがきら

くする。金髪の髻が帽の下から喰み出して、眞つ白な頸筋が白玉のやうに綺麗だ。富枝は後から、その姿を眺めてゐた。

校門の傍の洋品店の女が二人を見て店から挨拶した。その笑顔を見るとこの女にも逢へなくなるかも知れないと富枝は一寸振向いた。美術函の硝子戸に上田の姿が映つてゐた。

「大學創まつてからの功名者、實に誇とするに足りるわ。」
と上田は言つた。

富枝は横に上田を見た。肩を丸くして、脊を屈めて、伊勢崎紺の單衣を皺だらけにした椅の腰板の上へも序に目をやつた。

「けれど、こればかりは模倣はうと云つたつて凡力のものには出来ない事なんですよ、天才でなくつちや駄目ですわ、貴女は學校生活をして、學校制度の型に箝つて遣ると云ふやうな小さな器ぢやないんです。お遣りになつた方がいゝわ。飽くまで努力なさいよ、ね、荻生野さん。」

瘦せた、萎縮けた様な身體を伸して、上田は熱心に云ふ。熱が餘つて、思はず包みを抱へた手に蝙蝠傘を一所にして、明いた片手に荻生野の片手を握り占める。

「有難う。」

さすがに富枝も感謝を籠めた眼に、上田の面を見返す。平生は、餘り好いた友とも思つてゐなかつたが、今日、こんな場合に、この人の口から斯う云つた言葉を聞かうとは思ひもかけなかつた。他の友は今日の新聞記事を見てから、妙に隔てゝ近附くものさへ無かつた。一種の墮落だと譏つて、

憎いのは敬遠主義さへ取るのがある。だのに、この人の好意は意外だと思ふ程、嬉しかつた。

「学校をお廢めになつても、私だけは交際^{つきあ}はして下さい。私は貴女^{きん}を師と仰ぐわ。私だけはあなたの成功を祈ります。心^{こころ}から。」

富枝は黙つてゐた。こんな時、自分とよく話の合ふ昔の友人^{ともだち}を思ひ出して、その友人に自分の思ひを吐いて見たいと考へてゐた。

「上田さんは、三輪さんを覺えて在らつしやいますか。」

上田は考へるやうに首をまげた時、耳の後の垢が富枝の眼の前を遮つた。富枝は少し横に離れて歩を早めた。

「えゝ、僅か半學期ばかりで、退學なすつた方でせう。矢張り天才肌でしたわね。」

「然うでしたね。」

眉の迫つた、眼の美しい三輪の面影を忍んで、富枝は恍惚^{うつろ}するほど戀しくなつてくる。

兩人は何時か町へ出てゐた。派出所の前を通つて電車の線路の方へと向きを取る。

場末の寄席の淋し氣なのが、例^{いふ}ながら富枝の胸を滅入らせるので、今日も其れを振返つて不愉快な思ひで眺めた。

眞赤な毒々しい色で縁を取つた看板に、眞黒く浪花亭何々と認められてある。その看板を後にして、汚れた白い法被^{はっぴ}を着て、毛脛を出した男が、息潰^{いきつぶ}だ聲で、

「いらつしあい。」

と叫んでゐる。この煌々とした眞晝間、こんな煤けた様な薄暗い席亭の内に入つて、浪花節を聞いてゐる客の感じと云ふものは、何様ものだらうかと富枝は考へる。上田は氣が附かずに、平生踏み馴れた右側の軒の下を、拾う様にして歩いて行く。

二

路次を入らうとした富枝は、角の八百屋の前に見馴れた女が後向きになつて立つてゐるのを見附けてふいと立止まつた。女は草色の風呂敷を、マツフをする様にぐる／＼と兩手に捲き附けて、巻く擦れ上がった浴衣の裾から赤黒い太い足頸を見せてゐる。八百屋の店頭は青い色が皆濡れてゐた。「おきそ、おきそ。」

と、富枝は塗骨の扇子を口に當て支ひながら呼んだ。女は仰山に振返つて日和下駄を履いた足を飛ばし／＼馳けて來て、

「お歸りなさいまし。今日は御ゆつくりで在らつしやいましたね。」

とお辭儀を爲ながら笑つた。

「いゝから早くお爲よ。」

富枝は斯う云ひながら、おきその横髪に挿してゐる、自分のお古るの海老茶色の簪花を見た。おきそは又下駄の齒裏を見せて八百屋の店へかけ戻つた。紫メリンスの小さな帯の結び目が吸ひ附くやうに脊中の中央にとまつてゐる。立並んだ店の内で一軒で日除けをとると彼方でも此方でも日除

を外し始める、又何處かで水を撒きだすと隣家でも向ふ側でも撒き始める。簞笥町の廣い通りには小さな商店が同じ程な間敷の間口を揃へて並んでゐて、夕方のその道路は、富枝の重ね草履を漕こせるほど其方此方が濡ぬつてゐた。富枝はおきその袂たもとを捉へながら飛び／＼歩いた。

「お包みを持つてまゐりませうか。」

おきそは、蝙蝠傘と本の包みとを一所にして抱へた富枝の片手を覗いて聞いた。富枝は唯頭こぶしをふつた。通り過がつた理髪床で、客の頭髮かみの上にバルカンを手にした職人が人の通る通りを振返つた。白い上衣の裾が捲めくれたまゝその尖きだけがひら／＼と動いてゐる。

道がよくなると富枝はおきそを捉へた手を放して、又扇子を唇に當て支つて歩いた。おきそは片手にぶら提げた風呂敷包みを、自分と富枝の間へ提げ直した。ぶら／＼させるおきその手の波動に風呂敷包みは富枝の膝へ時折打突かつた。自分の膝へもその餘波を打ち突ける。富枝は風呂敷包みへ目を落してその風呂敷包みがおきその膝に當るとき更に目を上げておきその顔を眺めた。おきそは知らずにゐた。富枝は黙つて笑つてゐた。路次のなかは風が涼しかつた。富枝は襟止を外して少しばかり白絹の襟の肌襦袢の合せ目を寛くした。突當りの自宅の二階で、簾を捲いた人が座敷へ入らうとした後姿が柳がくれに見えた。

「兄さんはゐるの。」

と富枝は聞いた。おきそは在宅だと云つて勝手の方へまわつて行つた。

家の前には綺麗に水が撒いてあつた。

牛乳受函に淺黄色の雫が、溜つては落ち、溜つては落ちしてゐる。三寸程開き残した潜り戸には、もう半分通り打水が乾きかけてゐて、敷居に流れてゐる水の溜りが、涼しさうに戦いでゐた。

庭と區劃の木戸が開いてゐたので、富枝は其處から入つて庭の方へ廻つた。

鏡臺を前に据ゑて、お化粧をしてゐた姉の都満子は、富枝を見ると微笑した。

「遅かつたでせう。」

と富枝も笑ふ。垣根の傍の萩に袴を濡らしたので、ぐいと裾を引上げながら、茶の間の方の縁側へ向いて歩いた。

「もう、お湯へ入浴つて。」

とその艶やかな姉の顔を見て富枝は聞いた。姉はポットで粉白粉を叩き込んでゐた。粉が浴衣の襟にかゝつて散つた。

都満子は自分の濃い、長い、下り眉をもう一と際黛に濃くしてゐる。要らない事をする富枝に例も笑はれるけれども癖になつてゐるので、何うしても一と筆染めなければ、何となく顔面が引立たぬ様に思つて了つてゐる。自然、眉の配合を取る爲に、白粉も濃くなる。眞つ黒な髪を大きな丸鬢にして、幅を廣くかつた前髪を額へびたりと潰してゐる。來年、三十歳となる人にしては、随分若作りだと、富枝は例も然う思つてゐる。

眉筆を取つて、一寸、縁側の富枝を見た都満子は、

「お祝ひに兄さんが何處かへ連れて行つて上げるんですとき。」